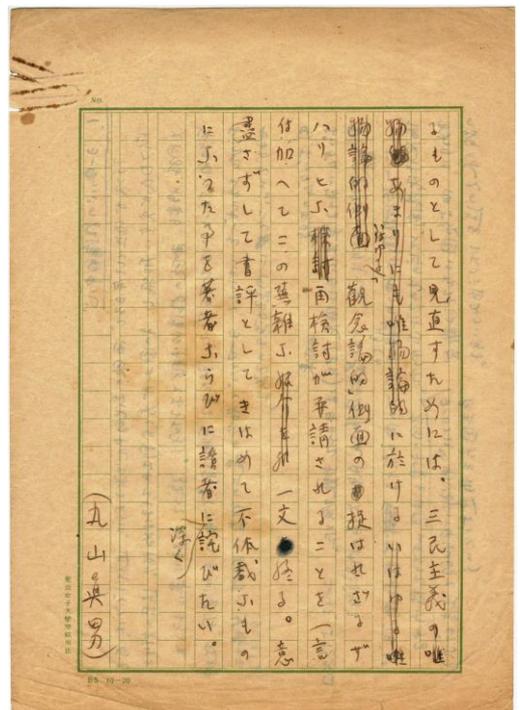


(1) 近代中国思想研究

一度目の応召が1944(昭和19)年10月に解除となったのち、丸山眞男は『孫文(そんぶん)全集』や梁啓超(りょうけいちよう)の著作など、近代中国思想の文献を日本語訳で読んだ。そして高橋勇治著『孫文』の書評を執筆している。この書評で注目されるのは、方法面で丸山の思想史研究に発展が見られることである。これは、丸山のそれまでの論文が思想を外から捉えていたことを批判し、思想を内側から捉えることをすすめた、親友の永山正昭(ながやまさあき)によるアドバイスを取り入れたものである。この方法によって孫文の三民主義にアプローチした丸山は、孫文の問題意識が、中国の近代国家化のために中国国民の内面における政治的主体性の確立を求めるものだったという理解に至っている。

支那(しな)が真の近代的民族国家として成長して行くためには、如何(いか)にしても、如何に困難であらうとも身につけねばならぬ条件と孫文が考へたものは(中略)経済機構乃至(ないし)政治組織それ自体よりもむしろ、さうした機構なり組織なりを内面的に支へて行く国民意識の問題、換言すれば、国家的=政治的なるものを国民大衆の内面的意識のなかにとり込むこと、それによって四億国民の一人一人が国家的秩序をまさに己(おの)れの秩序として主体的に担って行く様な国家を造り出すこと——即(すなわ)ち是(これ)である。(『孫文』書評草稿〈丸山文庫草稿類資料82〉:画像)



このような形でデモクラシーとナショナリズムを結びつける問題意識は福沢諭吉（ふくざわゆきち）にも見出され、戦後になると丸山自身のものになっていく。